

富山県と石川県による災害時広域連携訓練 ～人と人が織り成す不燃布～

(特活)多文化共生リソースセンター東海代表理事 地域国際化推進アドバイザー 土井 佳彦

「クレア・地域国際化推進アドバイザー制度」

国際協力または多文化共生に関する施策を推進する地方公共団体、地域国際化協会および市区町村の国際交流協会などに対し、クレアが「地域国際化推進アドバイザー」を派遣し、必要とされる情報や適切な助言、ノウハウの提供などを行うことにより、当該施策の推進および国際協力または多文化共生に対する住民理解の促進などに寄与することを目的として実施しています。

今回はアドバイザーの1人である土井佳彦氏が行った、災害時広域連携訓練のコーディネーター事例についてご紹介します。

広域連携による実施訓練

晴天に恵まれた2013年8月4日、富山県広域消防防災センターにて、富山県・(公財)とやま国際センター・石川県・(公財)石川県国際交流協会の4者共同実施による、災害時多言語支援センター設置運営訓練が開催されました。両県にとって、初の広域連携訓練です。

当該地域においては、1993年に能登半島沖地震(M6.6)が、2007年に能登半島地震(M6.9)が発生しており、富山県内でも負傷者が確認されています。東日本大震災以降、いつ起きるともわからない大規模災害に備えて、隣県での協力体制を構築しておくことは、今や喫緊の課題となっています。各地の地域国際化協会連絡協議会においても、書面上での連携協定締結など徐々に広域連携の体制整備が進められつつありますが、今回、具体的な訓練を共同実施した富山県と石川県は、その一歩先を歩み始めたと言えるでしょう。

県域を越えて

本訓練は、次のような設定で実施されました。8月2日(研修の2日前)、富山県域においてM7.4の地震が発生、直ちに富山県からの要請を受け(公財)とやま国際センターが「災害時多言語支援センター」

を設置。とやま国際センターは、東海北陸地域国際化協会連絡協議会の「災害時における外国人支援ネットワークに関する協定」に基づいて会長協会((公財)福井県国際交流協会)に対して支援要請を行った結果、石川県より災害時外国人支援ボランティアがセンターに参集。これにより両県合わせて8か国39人のボランティアと、各県協会職員を1人ずつコーディネーターとして配置して災害時多言語支援センターを運営することとなり、今回は筆者がセンター長を務めました。被災状況などを確認の後、「総務班」、「情報班」と「巡回班」に分かれて作業を開始。一連の流れと各班の作業については、クレアがまとめた『災害多言語支援センター設置運営マニュアル』および『災害時の多言語支援のための手引き2012』を参考に行いました。

午前は、全員が「総務班」として、富山県内の地図と地域別・国籍別の在留外国人データを照らし合わせながら状況を確認。必要な翻訳言語とそのカバー率、対象者別に必要と思われる



「総務班」の作業体験

情報などについて検討を行いました。ここでは現地の地理や外国人状況に通じている富山県側のボランティアが中心となり、応援に駆けつけた石川県側のボランティアとの間にある

情報ギャップを埋めることを目的としました。

昼食を挟んで午後、言語別に「情報班」を編成し、避難所の掲示物および富山県災害対策本部から発せられた情報を取捨選択のうえ、各言語に翻訳を行いました。今回は、参加者の構成から英語、中国語、やさしい日本語を各2チーム、ポルトガル語を1チームの計4言語対応となりました。これは、富山県在住外国人の母国語に対して、英語・中国語・ポルトガル語で約8割、そのほかをやさしい日本語でカバーすることになります。次に、会場をパーティションで2つに区切り、うち1つを仮想の避難所として、外国人参加者を被災者役に、日本人参加者を巡回班として模擬避難所巡回を行いました。巡回班は、各言語に翻訳した情報を手に、3、4人一組で各被災者の状況確認や情報提供を行いました。



避難所の巡回訓練

最後に全員でふりかえりを行い、本研修での気づきや課題を共有しました。多くの外国人参加者から、「今日の体験からたくさんのことを学んだが、どの作業も簡単にできることではないので、日ごろから訓練を積む必要があると感じた」という感想が寄せられました。また、日本人参加者からは「県域を越えて、いざというときにお互い助け合えるようになりたい」という声がありました。時間や会場などさまざまな制約がある中で、本番さながらの訓練とはいかないまでも、参加者一人ひとりが災害時における共助・公助の担い手としての自覚と自信を高めてもらえたことは何よりの成果です。また、コーディネーターを務めた両県協会職員には、今回初めて協働で災害時多言語支援センターの設置運営にあたっていただきましたが、その一連の流れと役割を深く認識されたものと思われま。来年度は石川県での実施に富山県側が応援協力することを予定されているので、本研修の成果がそこで発揮されることを願います。

たていと よこいと 経糸と緯糸を編む

富山県と石川県は、繊維産業が盛んな土地です。織物は、ピンと張られた経糸に緯糸を繰り返す

ことで、線から面へと形を変えて作られますが、本研修の成果は、まさに企画運営にあたった両県の関係者と多くの市民ボランティアが織り成す美しい“不燃布”のようでした。「地域の防災力向上」を共通目的に、それぞれがこれまでの取り組みを通じて紡いできた太い人脈（経糸）に、所属や立場、地域を越えた人の連携（緯糸）が合わさって、災害に負けないものを形づくっています。「行政は担当者が替わると事業ノウハウが引き継がれない、民間も所属や立場を超えて連携することが難しい」などと言われますが、ここではその言葉は当てはまりません。連携・協働のお手本のような事業でした。

次の世代へ

大規模災害に備えた広域連携の必要性は認識されつつも、準備から実施までに相当の労力を要することから、行政区を越えた実地訓練は全国でもほとんど実施されていません。経験値における「0」と「1」の差は、「1」と「2」よりもはるかに大きいものです。たかが訓練、されど訓練。東日本大震災以降、どのような訓練が本当に効果的なのかとあちらこちらで模索が続いていますが、災害時対応という答えのない問いに対しては、可能な限り実践的な取り組みを一つ一つ積み重ね、少しずつ改善していくしかありません。



土井氏による講義

日米通算4,000本安打の偉業を達成したイチロー選手は言いました。「4,000本のヒットを打つには、8,000回以上の悔しい思いと向き合ってきた自分がある。そのことを誇りに思う」と。私たちのチャレンジはまだまだ続きますが、それこそが次の世代に誇れるものだと思います。

お問い合わせ先

(財)自治体国際化協会多文化共生部多文化共生課

TEL:03-5213-1725

E-mail: tabunka@clair.or.jp

Web: <http://www.clair.or.jp/j/multiculture/sokushin/advisor.html>